

# 構 想

第 1 号

馬路ゼミ 2022 年度論考

## はじめに

馬路ゼミにとって最初の（その意味で記念碑的な）論集が完成しました。寄稿した現役ゼミ生の皆さん、お疲れさまでした。論集のタイトルは、『構想』としました。これは、ゼミ生が教養学部1・2年の大切な時期に抱いた、今後の礎石となるような初発のアイデアが詰まっているという意味から名付けたものです。

2021年の夏頃、当時高山ゼミの1年生（高山ゼミ30期）であった学生たちから、高山博先生が退官を迎えられるにあたって、今後も高山ゼミのような授業を開講して欲しいとの依頼を受けた際、私は少々躊躇しました。高山先生が約30年間にわたり継続してこられた授業をとっても真似することはできないと考えたためであり、また本当に開講するとなった際には1、2年で終わるような仕方ではなく、ずっと継続したいという想いが私の中にあったからです。

そうした逡巡を止め、開講しようとした理由は主に3つあります。一つ目に、学生たちの熱意です。その後高山ゼミ30期の学生たちと複数回ミーティングを行う中で、彼／彼女らが、当該ゼミのような真摯に学び合い、共に高め合う空間を本当に望んでいることを認識しました。二つ目に、高山先生からの言葉です。年が明けた冬に、先生にご相談した際、「後継ゼミになるとか、そうしたことは考えずに、君の好きなようにやれば良い」と仰って頂いたことで、心が軽くなりました。三つ目に、おそらくこれが最も重要な決め手となりましたが、高山ゼミのような空間は私自身にとっても必要であろうと考えるに至りました。というのも、私は近代の政治思想史を研究しており、そのため研究業績を積み重ねるといった観点に立てば、どうしても過去（昔の思想家のテキストと当時の文脈）にのみ目が行きがちです。しかし、「歴史とは、歴史家と歴史的事実のあいだの相互作用の絶えまないプロセスであり、現在と過去のあいだの終わりのない対話」なのであるという（有名な）アフォリズムが示すように、本来であれば過去の思想のみを見ているとそれを理解し、叙述することは出来ません。ゼミを通して私自身が、今日の世界の動向やそこにおける諸問題を注視し、学生たちと学び続けていくことが肝要であると内省しました。

馬路ゼミは、基本的には高山ゼミの運営方法（英文記事の分析、学生の研究報告、合宿での将来計画の報告）に倣い、それを踏襲していますが、いくつか変更した点もあります。その一つがゼミ全体のテーマです。高山ゼミは「グローバル化とメディア」を掲げていましたが、私は「ポスト・グローバル化」世界における課題を検討する必要があると考えています。その核心にあるのが、「人間と非人間のあいだの関係の再構築」であろうと思います。すなわち、我々人間が、疑似自律性を持つAIなどの技術や自然環境（海、大気、鉱物資源、動植物、ウィルスなど）と今後いかなる結び付きを築いていくのかという問題です。このため、馬路ゼミの看板は「地球社会におけるリアリズムの探求」としています。「地球」という言葉に、人間の構築物としての「世界」以上の意味を込めたものです。今年度に扱った宿題記事のいくつか——“Locked down in Shanghai, I’ve caught a glimpse of our techno-dystopian future” (*The Economist*, 26 Apr 2022), “The big idea: should other species have their own money?” (*The Guardian*, 14 Mar 2022), “The White House just unveiled a new AI Bill of Rights” (*MIT Technology Review*, 4 Oct 2022), “Want a green transition? We’ll need to mine for it” (*Prospect*, 6 Oct 2022)——もそれを反映しています。

最後に、新しいゼミの構築に向けて尽力してくれた現役馬路ゼミ生の皆さん、とりわけ高山ゼミ30期＝馬路ゼミ1期の皆さんに「ありがとう」と伝えさせて下さい。今年度は研究室訪問の高校生との交流や駒場祭での模擬ゼミ開催など、公式なゼミ以外の場でも奮闘してくれました。皆さんが作ってくれた土台を大切に、時代に合わせた変化も取り入れつつ、長くゼミを続けていきたいと思えます。

馬路智仁（2023年3月7日）